服のチカラ

世界を良い方向に変えていく

07 日本で世界で、今、
服ができること。

MADE FOR ALL ユニクロ UNIQLO

世界を良い方向に変えていく

服のチカラ

07

日本で世界で、今、服ができること

表紙の写真：
ユニクロの服を着たザンビアの母子

※表紙とP13の写真を撮影した
フォトグラファー 上岡伸輔氏のルポを
P15に掲載しております。

CONTENTS

03　東日本大震災
被災地への支援活動

06　着なくなった服、どうしていますか？

08　ユニクロの「全商品リサイクル活動」

10　本当に必要な服を届けるために
重要な「分別作業」

12　母と子の身体を守る服
「ザンビアの農村で今、起きていること」

14　「全商品リサイクル活動」の
今日までの道、そしてこれから

15　PHOTOGRAPHER'S REPORT
上岡伸輔

「服のチカラ」は、日本語版と英語版、韓国語版を発行し、
ユニクロの店舗で配布しております（なくなり次第終了）。
下記WEBサイトでは、最新号とバックナンバーもご覧いただけます（写真は前号のvol.06）。

www.uniqlo.com/jp/csr

東日本大震災　被災地への支援活動

この度の東日本大震災により、
多くの方の尊い命が失われたことに深い哀悼の意を捧げるとともに、
被災地の皆様へ心よりお見舞いを申し上げます。

ユニクロでは、
店頭募金と売上金の一部を義援金・支援金として
寄付するプログラムを実施しております。
これらの寄付金は日本赤十字社などを通じて、
被災地の復興に役立てられます。
たくさんのお客様からのあたたかいご支援に心より御礼申し上げます。

また、私たちは「服」を企画、生産、販売する会社の責任として、
義援金・支援金や被災地への支援衣料の寄贈はもちろん、
従業員ボランティアによる直接衣料配布も行っています。

直接配布について、当初は、被災地の状況やニーズに合わせて、
男女別・サイズ別のセットをつくり、主に避難所でお渡ししていました。

しかし配布活動を続けていく中で、ただ服をお届けするのではなく、
よりご満足いただける方法で、本当に必要な服をお届けしたい、との思いから、
自衛隊が運営するお風呂の前など、人々が集まりやすい場所で、
男女・サイズ・アイテム別に分けた箱を並べて、日常のお買物のように、
好きな服を選んでいただく方法に変更しました。

また、当初はヒートテックやフリースなど防寒着が中心でしたが、
「代えの下着がない」「断水で洗濯ができない」という声も多く頂き、
下着や靴下、Tシャツなど、衛生面に配慮した商品に変更しました。
季節や状況の変化とともに変わる、「今、本当に必要な服」をお渡ししてきました。
お渡しした方からは「ユニクロのお買物袋もあって、まるでお店に来たみたい」
「久しぶりにお買物気分を楽しめました」
「下着や靴下がなかったので、とても助かりました」というお声をいただき、
私たちは、服の持つチカラと大切さを、改めて実感しました。

本当に服を必要としている人に、必要な服を届ける。
服を生産・販売するだけではなく、その価値を最大限に活かす。
これこそ、私たちが社会に果たすべき責任だと考えています。

私たちは、服が持つチカラのあらゆる可能性を、
みなさんと一緒に見つけていきたいと思っています。

そして日本を、世界を良い方向に変えていくことを目指していきます。

具体的な支援について、経過のご報告
（2011年5月24日現在）

皆様のあたたかいご支援に、心より御礼申し上げます。

店頭募金

全世界約2,200店舗に募金箱を設置いたしました。4月末時点の合計額は217,786,572円です。
日本および各国の赤十字などを通じて、被災地の復興支援に役立てられます。

売上の一部を寄付

・日本国内のユニクロで、商品1枚の売上から100円を寄付する支援プログラムを、
実施日と対象商品を限定して行っております。

実施日	対象商品	義援金
4月9、10日	ドライカラーTシャツ	26,790,000円
4月23日～5月8日	ポロシャツ	205,478,500円
資金総額		232,268,500円

上記のうち、227,268,500円を「桃・柿育英会 東日本大震災遺児育英資金」（※）に寄付し、
5,000,000円を日本赤十字社に寄付いたします。
※建築家 安藤忠雄氏が実行委員長として設立。代表取締役会長兼社長の柳井正も発起人として参加しています。

・東日本大震災の発生直後から被災地支援を目的に立ち上げられた、
エリア別救済支援情報サイト「SAVE JAPAN!」の趣旨に賛同し、同サイトの支援企業である
コンデナスト・グループが発行する雑誌『VOGUE JAPAN』、『GQ JAPAN』の呼びかけのもと、
世界的な著名人からの応援メッセージTシャツ「SAVE JAPAN! UT」を、
６月２５日より 全世界のユニクロ店舗で発売いたします（なくなり次第販売終了）。
このTシャツの利益となる約1億円は、東日本大震災の義援金として日本赤十字社へ寄付いたします。

支援衣料の寄贈

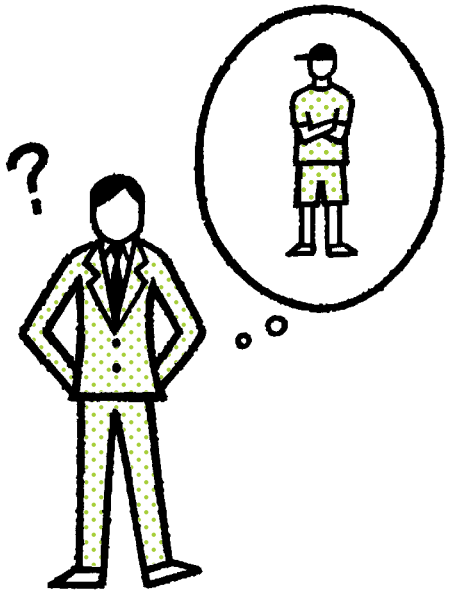
生活ニーズの高い下着類を中心に、85万着（約7億円相当）を寄贈。
確実に届けるために、従業員120名が現地に赴き、
NPOと協力し配布のボランティア活動を実施いたしました。
・ 宮城県　47万着を発送（3月20日、26日、4月3日、9日、10日、16日、17日、23日、24日に実施）
・ 福島県　30万着を発送（3月20日、4月3日に実施）
・ 岩手県　5万着を発送（3月22日、4月9日、10日、16日、17日、23日、24日に実施）
・ 茨城県　3万着を発送（3月25日に実施）

お取引先様からの支援

義援金：合計約1億3,000万円　支援物資：毛布など20万枚

義援金の寄付

ファーストリテイリンググループから2億円、全世界のファーストリテイリンググループ従業員から
約1億8,000万円、代表取締役会長兼社長の柳井正個人から10億円の義援金を、
日本赤十字社に寄付いたします。なお、ファーストリテイリンググループから1億円を、
復興支援活動に取り組むNPO団体などに寄付いたします。



case #01

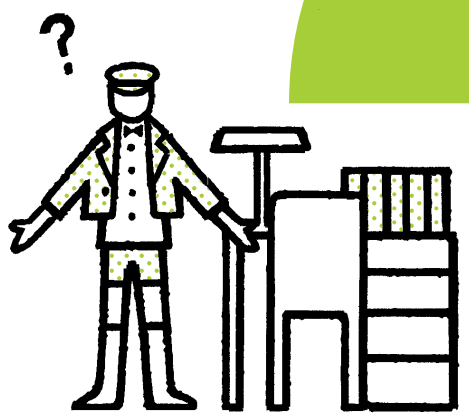
社会人になったら、よく着る服も変わってきた

学校を卒業して社会人に。生活スタイルが変わったら、服の好みも変わったみたい。気持ちはもちろん、服装も社会人らしく変えていこう。クローゼットを整理したいな。

case #02

背が伸びたら、あれれ？丈が短くなっちゃった

急に手足が伸びて、丈が短くなったのが気になる。すごく気に入っていたから残念だな。



case #03

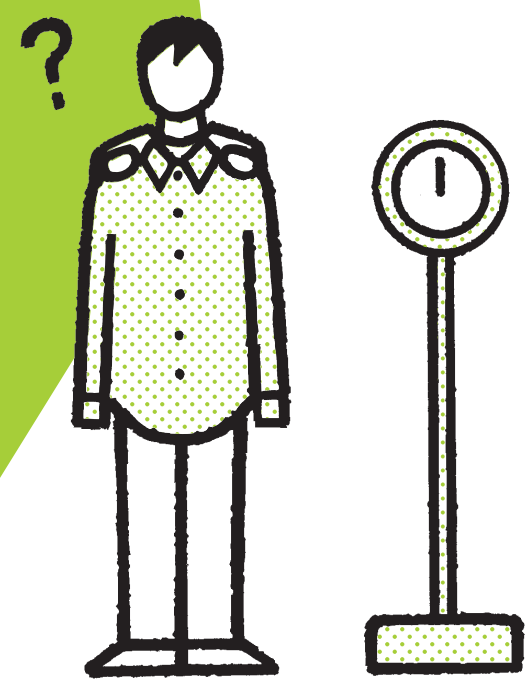
服が大好き！でも、タンスに入りきらなくて…

数年前に流行った服。またいつか着ようと思って、大事にとっておいたけれど、そろそろタンスからあふれそう。思い出もいっぱいあるし、お気に入りの服だから、そのまま捨てるのはツライ…。

case #04

衣替えの機会に、クローゼットを整理しよう

衣替えをするために、服を整理していたら、最近着ていない服を見つけた。このまましまっておくのは、もったいないな。



case #05

体型が変わって、服のサイズも変わったこれまでの服はどうする？

体型が変わって、僕は着なくなった服。それほど着ていないし、サイズさえ合えばまだまだ活躍できそう。もったいないけど、もう捨てるしかないの？

着なくなった服、どうしていますか？

サイズが合わなくなった服、前のシーズンの服、
好みが変わって自分では着なくなった服、みなさんはどうしていますか？
処分してしまうつもりなら、ちょっと待って！
まだまだ活躍できる可能性があるかもしれません。

ユニクロの「全商品リサイクル活動」

ユニクロの年間総生産枚数は約6億着。私たちは、
お客様が着なくなった服を回収し、再び役立てることも、大切な責任だと考えています。
着なくなったユニクロの服は、ご家庭で洗濯をしてから店舗までお持ちください。
日本・韓国の全ての店舗では、1年を通じて、回収を行っています。
また2010年10月からは、ジーユーの店舗でも回収をスタートしました。

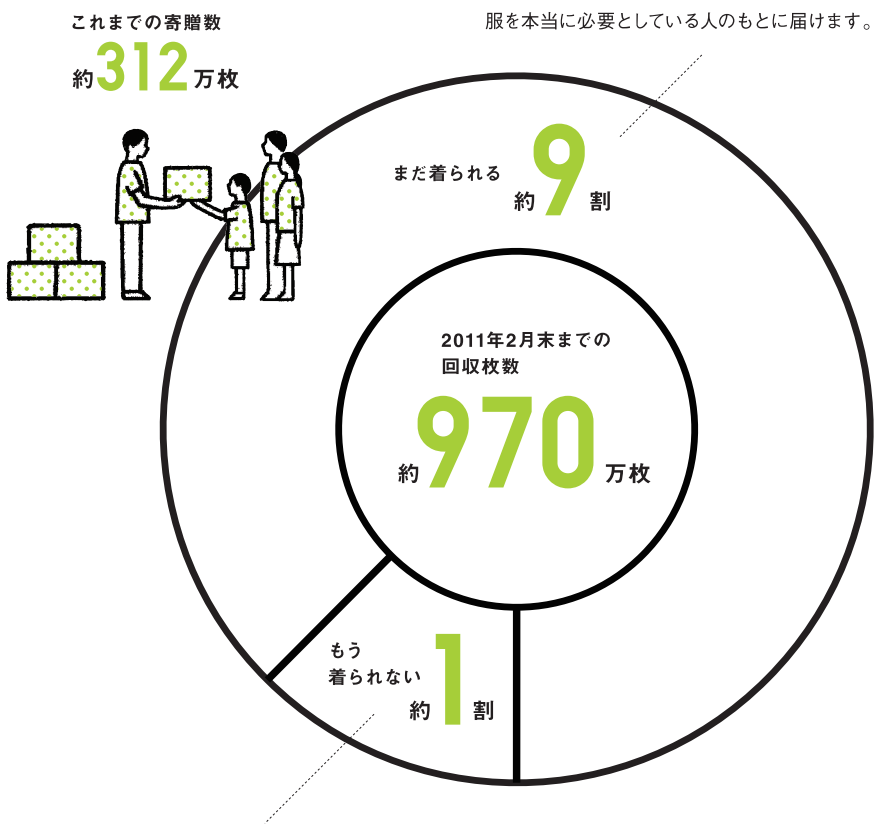
お客様からお預かりした服のゆくえ

① まだ着られる／もう着られない、を分ける

店舗で回収した服は、まず「まだ着られる服」と「もう着られない服」に分別。回収した服のうち約9割を占める「まだ着られる服」は、服として再び活躍できるよう、細かな分別の工程に進みます。

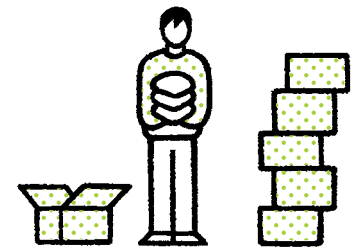
本当に必要な人に、もう一度、着てもらう

まだ着られる状態の服は、服としての価値を最大限に活かすために、服を本当に必要としている人のもとに届けます。



新しいカタチに生まれ変わる

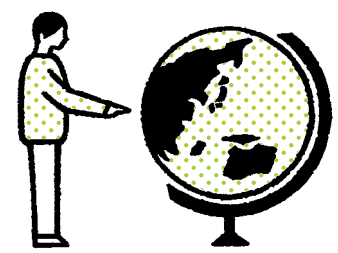
もう着られない服は、繊維素材としてリサイクル。
主に、工場などで機械の油拭きに使用される雑巾、
「ウエス」に生まれ変わって、最後まで活かされます。
何度も洗濯して使い込んだ布は、油分をよく吸収するので、
リサイクルで回収した服の素材はウエスには最適な材料です。



② 12種類に分別 » P10–11

季節や男女、アイテム、サイズ別に細かく分別。1枚1枚確認し、確実にすばやく分別する作業は、熟練した腕前と豊富な経験が必要とされます。詳細はP10-11で紹介しています。

↓

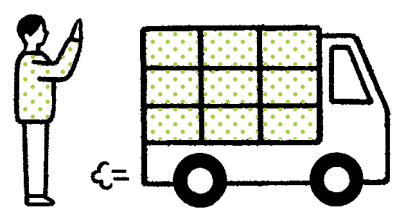


③ 届け先、届ける衣料を決める

今、本当に服を必要としているのはどこの国？、現地の気候は？、文化や宗教上、配慮すべきことは？…など、本当に必要としている人に、本当に必要な衣料を届けるために、事前のニーズ調査は必須。UNHCR（※）や各国の協力機関とともに、届け先と届ける衣料を決めます。

※UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）：難民・避難民を国際的に保護・支援し、難民問題の解決に努める国連機関。1954年と1981年にノーベル平和賞を受賞。2011年2月、ファーストリテイリングとグローバルパートナーシップを締結

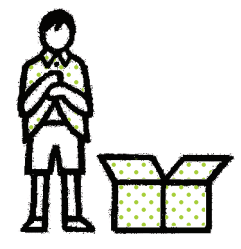
↓



④ 確実に届ける・確認する

大切なのは、発送した衣料が、輸送中に紛失、転売されることなく確実に届くこと。ユニクロでは、従業員が直接現地に赴き配布するなど、衣料が確実に届くまでを見届けています。また現地の繊維産業への影響について配慮もしています。

↓



⑤ もう一度、着てもらう » P12–13

約3,600万人といわれる、世界中の難民・避難民の方々に、一人に一着ずつ、届けるのが目標。また難民キャンプ以外でも、服を必要としている地域に配布を実施。P12-13では、ザンビアの診療所での衣料配布について、レポートしています。

本当に必要な服を
届けるために重要な「分別作業」

**本当に服を必要としている人に必要な服を届け、すぐに着ていただけるように、
衣料の分別作業は、欠かせない工程のひとつです。**

まず「着る人の身になって考える」

「『服』は『服』のまま役立てたい」「衣料の価値を最後までムダなく活かす」。それが全商品リサイクル活動の考え方。その実現のためには、その服を受けとり、実際に着てくださる皆さんの事情やニーズを的確にくみ取り、気持ち良く活用してもらえる服を届けることが必要です。集められたたくさんの服を、分別し、整理してお届けする。まず「使う人の身になって考える」。それがとても大事な姿勢だと思っています。

事前の分別が必要な理由

服を分別する作業は実は大変な仕事です。1枚1枚の服は薄くて軽いようでも、大量になると、その体積や重さは相当なもの。しかもこの作業は機械ではできません。服の種類やサイズ、素材、傷みや汚れの程度などをきちんと判断し、よりわけます。こうした作業を、生活条件の厳しい難民キャンプなどで行うことは大変です。なるべく現地での作業を減らしたい。必要な人に、なるべく早く着てほしい。そういう思いで船積み前に分別作業を行っています。

国や文化によっても異なるニーズ

世界にはさまざまな国や地域があります。暑さ、寒さ、乾燥のぐあい、四季のあるなし、平均的な体型の違い、独自の文化や宗教の決まりなど、考えなければならないことはたくさんあります。たとえば、ある地域では特定の動物の絵が入ったものは受けいれられないとか、ある特定のカラーに人気がある（もしくは嫌われる）といったことは、事前に考えておかねばなりません。隣りあった国でも服のニーズが全然ちがう。そんなことも珍しくありません。

interview

**分別にご協力いただいている
ナカノ株式会社
代表取締役会長　中野聰恭さん**

「衣・食・住」の中でも「衣」はその一番に挙げられているように、赤ちゃんが生まれてきて最初に必要になるもの。必要な人に、求められている服を届けることはとても重要なことです。ただそこで大切なのは、こちらが「届けたいもの」ではなく、先方が「必要としているもの」を届けることです。そうでなければ有効に活用されません。その国の文化や気候風土、宗教などをよく知って、適切に服を分別し、贈り先のニーズに合ったものを届けることが真に役立つ活動を続けるカギであると思います。

「分別作業」の流れ

店舗で回収した衣料は、分別拠点に集められます。東日本だけでも、1日あたり毎日4トントラック2〜3台分もの衣料が届きます。

リサイクル専門業者の協力を得て、まずは着られるものと着られないものに、そして着られるものは、男女、季節、アイテム、サイズなどの基準に沿って12種類に分類、整理します。

選別した服は、専用の装置で圧縮。圧縮後は丈夫な布で包みこみ、周りを太いワイヤーでしっかり結びます。

厳重な梱包は、服を傷みから守ると同時に、輸送中の抜き取りや異物の混入を防ぐ効果があります。

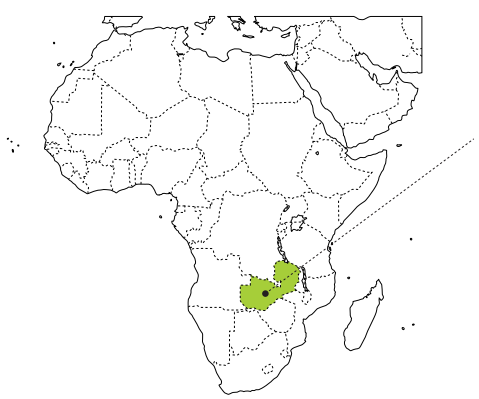
母と子の身体を守る服
「ザンビアの農村で今、起きていること」

今、本当に服を必要としている人に、必要な服を届ける。
2011年春は、ザンビアの診療所を訪れ、お母さんと乳幼児の服を中心に配布を行いました。

17歳のノラさんは朝6時に起きて、数時間の道を歩いて産前健診会場の診療所にやってきました。ひとつはお腹の中にいる赤ちゃんの健診のために。もうひとつは、ユニクロから贈られた服を受け取るために。ノラさんにとってはこれが初めての妊娠です。
アフリカ南部の国、ザンビアのマサイティ郡は、東京都の3倍の地域に12万人の人々が住んでいます。でもそこに医師はたった1人、助産師は12人しかいません。同国の乳児死亡率は日本の約43倍、世界平均の約2倍に達しています（※ジョイセフ公式ホームページより）。
ユニクロの全商品リサイクル活動の衣料支援パートナーである、国際協力NGOジョイセフ（※）は、ここザンビアなど途上国の妊産婦と女性を守るために、さまざまな活動を行っています。ノラさんが参加した産前健診もその一環。
ユニクロはお客様からご提供いただいた服を難民キャンプだけでなく、こうしたザンビアの健診会場のように、日常生活シーンの中でも、乳児向け、お母さん向けの衣料として参加者に配布しています。
発展途上国で乳児の命を奪う大きな原因のひとつがマラリアという病気です。マラリアはハマダラカという蚊を媒介に病原体が体内に侵入することで発病します。つまりできる限り蚊に刺されないようにすることが、乳児を守るためにとても大切なのです。もちろんこれは大人にとっても同じように重要なことです。
ザンビアの農村では、赤ちゃんが生まれると両親は分厚い毛糸の帽子やセーター、靴下などを用意し、赤ちゃんに着せます。蚊に刺されることを予防するためです。しかし、残念なことに充分な服を買えるだけの現金収入がない両親が数多くいるのが現実です。
ノラさんをはじめ出産を控えた女性たちは、健診会場で出産や育児に関する知識を深め、生まれてくる赤ちゃんと自分のために用意された服を受け取って帰ります。正しい知識と身体を守るための服。この2つが両輪となってザンビアの子供たちの健やかな成長につながってほしい。これも服のもつチカラのひとつだと思います。

ジョイセフ JOICFP
Reproductive health for today and the future

※ジョイセフ(JOICFP＝ Japanese Organization for International Cooperation in Family Planning、財団法人家族計画国際協力財団)。1968年設立。アジア・アフリカ・ラテンアメリカ地域諸国において女性・妊産婦のための母子保健の国際協力を行っているNGO



ザンビア共和国
首都はルサカ。人口約1,300万人（2009年）
（出典：外務省ホームページ）
一人当たりGDP 1221ドル（2010年）
（出典：IMF Data and Statistics 2010年）
世界三大瀑布のひとつ「ヴィクトリアの滝」がある

ユニクロの服を着て、笑顔で話すノラさん。「出産の日がとっても楽しみ。元気な赤ちゃんが生まれるといいなと思います」

「全商品リサイクル活動」の今日までの道、そしてこれから

服の価値を最後まで、最大限に活かしたい。
ユニクロの全商品リサイクル活動の歩みと、これからについて紹介します。

ユニクロの全商品リサイクル活動は、2001年のフリースリサイクル活動からスタートしました。その後、リサイクルの対象をユニクロで販売している全商品に拡大し、現在、日本・韓国の全ての店舗で、1年を通じて回収活動を行っています。またその他の国でも、順次、回収をスタートしていく予定です。

これまでの総回収点数は970万枚。そのうち約170万枚をUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）を通じて、ネパール、エチオピア、グルジア、パキスタンなど13カ国に寄贈しました（2011年2月末現在）。一方、世界の難民・避難民数は約3,600万人。服を必要としている人数に比べると、まだまだ足りない状態です。難民キャンプを訪れる度に、今できていることと、まだまだやるべきこと、その両方を強く感じます。

2011年2月、より広い分野での難民・避難民問題の解決を目指し、UNHCRとグローバルパートナーシップを締結しました。UNHCRとはこれまでも、ニーズの調査や適切な輸送の面で、協力して活動を進めてきました。

2009年からは、さまざまな分野で活躍するアーティストや著名人の方がデザインしたTシャツを、全世界のユニクロで販売する共同プロジェクトも展開。このTシャツの収益の一部は、UNHCRへの寄付と難民支援活動に充てられます。2011年度も各界の著名人、アーティスト、学生がこのプロジェクトに参加しています（下記参照。商品はなくなり次第販売終了）。

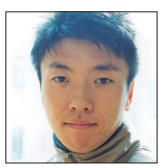
今後は、UNHCRとの連携体制を一層強め、寄贈国の範囲の拡大や、日本で難民として受け入れられた方々のユニクロ店舗でのインターンシップの実施などの活動も展開していきます。

これからも、服の価値を最後まで、最大限に活かす活動を、進めていきたいと思っています。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

UNHCR
United Nations High Commissioner for Refugees
CHARITY T-SHIRT

2011年度の参加アーティスト、著名人

（50音順、敬称略）


石川直樹

小田和正

国枝慎吾

黒木メイサ

佐渡裕

野口健

宮本笑里

J-FUN ユース

store.uniqlo.com/jp/store/feature/ut/unhcr/

PHOTOGRAPHER'S REPORT
上岡伸輔 // shinsuke kamioka

服を通して通じる

2008年 エチオピアのシメルバ難民キャンプにて

ユニクロに同行して、2007年より世界各国の難民キャンプを訪問してきた。

上の写真は2008年に訪れたエチオピアの難民キャンプ。一党独裁の続く隣国エリトリアから逃れてきた人々が滞在している。難民の男性の8割ほどは脱走兵ということだった。着の身着のまま逃れてきた彼らの多くは軍服姿のままで、それが難民キャンプの中で望まぬ緊張感を生みだしていた。そんな彼らが軍服からユニクロの服に着替える。すると周りの雰囲気が一変し、本人たちも肩の力が抜け、生き生きとした表情に変わった。人々の間に立ちはだかる壁の一つを服が壊した、そんな服の威力に触れた瞬間だった。

このプロジェクトで、世界各国の人々と出会い、実感していることは、感じる心は同じだということだ。異なる文化や習慣による違いはもちろんあるが、それ以上に人間の根底にある喜びや悲しみはどこも同じなのではないか。だから、新しい服を前に人々が感じる喜びは、生活環境が全く異なるここ日本でも想像できることと思う。そして反対に、日本から遠い道のりを経て服が届けられた時、受け取った人々は新しい服を得られる喜びとともに、日本から贈られたその想いを確実に受け止めていると思う。困難を伴う時もあるが、気持ちは伝えることができる。服を通して人が繋がり、通じ合っていく姿を、僕は確かに目撃してきた。そして、時には服が、その力を如何なく発揮する場面に出会えた。例えばエチオピアで、人々の心の垣根を取り払うという大きな役割を果たしたように。

上岡伸輔　1974生まれ。広告、雑誌、ファッションカタログなどを中心に幅広く活動中。
http://www.skamioka.com / http://www.mili.jp

私たちが考える
「日本で世界で、今、服ができること」

東日本大震災に対する支援活動を通じて、改めて気が付いたことがあります。それは、私たちが日常的に行っているユニクロのビジネスも、全商品リサイクル活動も、震災に対する支援活動も、そこで大切にすべき基本的な考え方は全く同じであるということでした。

ユニクロのビジネスは「お客様の立場に立脚」することに全ての出発点があります。この姿勢は商品開発から生産、店舗での接客、販売の全体に貫かれています。

全商品リサイクル活動でも、難民キャンプなどの寄贈先でどんなニーズがあるのか、それを正確に把握し、現地の状況に合わせて細かく選別し、お届けする。そうすることで初めて服を有効に活かすことができます。

震災の支援活動では、被災地がどのような状況で、どんな衣料が最も必要とされているのかを的確に把握する。さらに被災地で、どんな方法でお配りするか、どのような姿勢で被災者の皆さんに接するべきなのか。社内で真剣に議論を重ね、実行しては反省点を洗い出し、改善して、また実行する。こうしたことの繰り返しでした。支援活動でも日常のビジネスと同じように「現場、現物、現実」を重視するユニクロの活動は、今も続いています。

もちろん私たちの支援はまだまだ不十分で、足りない点、反省点がたくさんあります。しかし、活動に参加しているスタッフが、その経験を通じて改めて強く感じていることがあります。それは、どんな場合でも常に相手の立場に立って考えることの大切さ、そして、服には本当に人を幸福にするチカラがあるのだ—ということです。

全商品リサイクル活動も、東日本大震災に対する支援活動も、短期間で終わるものではありません。息の長い取組みが必要です。いきなり大きなことはできないかもしれない。でも私たちはやり続けます。「日本で世界で、今、服ができること」を常に追い求めながら、一歩ずつ前に進んでいこうと思っています。

FAST RETAILING

「服のチカラ」vol.07　発行元：株式会社ファーストリテイリング　www.fastretailing.com/jp/csr